

## 彦根・芹橋のまちづくりを考える(2) 路地がひろく未来の芹橋



彦根景観フォーラムと彦根辻番所の会は、2010年11月23日、四番町ダイニング多目的ホールでシンポジウムを開催しました。

テーマは「路地を生かす」。講師と約80名の参加者で熱心な討議が行われました。その後半を紹介します。

者世帯が多く、通路がふさがって災害時の避難誘導・救助が極めて困難であるなどの課題に住民自身が気づきました。

そして、高台への貯水槽の整備や堀や川へのアプローチの整備を行政に依頼するとともに、各戸の井戸を地域で共有する井戸マップを作成し井戸用手押しポンプを復活させる、近隣の若者が多いアパートなどを取り込んだ防災活動を行うなどのアイデアが出され、地域の一体感を向上させ、若者を地域行事に招く取組がはじまりました。

また、実際に防災対応訓練をしてみると、まちなかでのバケツリレーは5分間続けるのが精一杯で、高齢者の誘導も避難経路が確保できず困難を極めました。この結果、住民自身に災害対応が全くできていないという自覚が広がったと報告されました。

### ●芹橋の予想される災害リスクと対策

午前の現地見学に参加された大窪先生は、木造住宅が密集する芹橋周辺でも、地震により発生した火災が延焼する



こと、路地が閉塞し避難が困難になることの二つのリスクが大きいと指摘されました。

対策としては、歴史的な水利である芹川と堤防脇水路、井戸の活用をあらかじめ計画しておくこと、路地が閉塞することを想定し、敷地の裏側の庭や背割り水路を横につないで家の後から空き地や駐車場へ逃げられるように小径を準備しておくことなどが考えられるとされました。

### 歴史地区の住民防災まちづくり(事例報告2)



大窪健之・立命館大学教授は、阪神淡路大震災の経験を教訓に、大規模災害では住民による初期活動が重要なポイントで、住民主体の防災訓練が日常的・継続的に行われる工夫が大切と強調されました。

国が指定した重要伝統的建造物群保存地区(重伝建地区)でも、地区防災計画が策定されているのは全体の半数であり、さらに住民と一緒に計画を作ったのは2地区だけで、行政から住民への一方通行になっている。その結果、いざ住民が初期活動をしようとしても多くの支障が出ると指摘されました。

### ●図上訓練と防災訓練で課題が明確化

大窪先生は、重伝建地区である兵庫県篠山市の城下町地区と京都府美山町北のかやぶき集落地区の2地区で、住民と一緒に災害図上訓練と実際の防災対応訓練を行い、そこで浮かび上がった問題点から、住民視点の防災計画と設備整備を検討されました。

篠山市の例では、住民ワークショップを開催し、災害図上訓練をしたところ、消火栓の水圧低下が起ること、水源としての堀や川に降りる方法や取水の仕方が不明であること、密集した市街地には高齢

### 地域ルールづくりから始めよう(全体討議)

参加者から、現代の生活や商売と自動車の必要性、芹橋の観光地化のあり方、市民防災の進め方、具体的なまちづくりの進め方などについて質問が出され、活発な議論がされました。

●彦根のような地方都市では、自動車が自宅まで来ないと若者は住んでくれない。路地を広げないと芹橋はますます人口が減る。また、駐車場のない商店街には客が来ないのが現実だが、どう考えるか。



若者が既成の市街地の実家から出て郊外に家を持ち戻ってこないのは、路地があるからとい

うわけではなく、全国共通の傾向でした。しかし、世代替わりとともに高齢化した子ども世代が車に頼らなくても生活できる既存市街地に回帰する傾向が生じています。商店も、人口減少・少子高齢化で郊外の大規模店は採算が悪化し、独自の感性で固定ファンをもつ小さな店が繁栄しています。

社会の流れは大きく変わってきています。これまでの成功事例や固定観念にとらわれず、未来の視点から芹橋の個性であり強みである街中の立地と歴史資源である路地を生かし、他の方法で欠点を柔軟に補う知恵を出すことが大切だと思います。

●小さな子どもを抱えている若い世代は車が必要と思うが、どう考えればいいか。



○西村 私も狭い道のどんつきに住んでいて、車は100メートル以上離れたところに置

ている。車が全く入れないとすごく不便だが、芹橋は何とか車が入れる。そこで長時間止めなくても済むような駐車場が分散的であって、4、5分ぐらいで行けるのであれば、それほど問題はないと思います。

不便というマイナス面もあるが、静かだとか、安全だとか、子どもが心配なく遊べるとか、いい面もある。バランスで考えるといいと思います。

●市民が簡単に使えるような消火栓があると聞いたが、教えてください。

○大窪 易操作性消火栓といいます。

ホースの直径が35ミリぐらいで、消防が使う65ミリに対してはパワーは非常に弱いんですが、コックをひねるだけで使え、1基10万円ぐらいまでです。

京都の清水寺周辺地域で震災対策の防火設備を整備する事業で、公設の消火栓と同時に市民用の消火栓を25メートル間隔で置いています。ホースの中にコイルが入っていて、誰でもすぐ使えます。それを普段から使うという考え方で、道路の水まきから車の水洗い、庭木の水まきにまで使っています。

市民用の消火栓を身近なところに設置して、維持管理は地域が担うシステムは、ポテンシャルが高いと思っています。

●芹橋が観光地化し、沢山の見知らぬ人が入ってくると、住民は不安を感じるのではないか。

観光地化は本来の目的ではないが、芹橋の歴史的資源に磨きをかければ、副次効果として魅力のある街になり、住む人も増えるが見たい人も増える。そうなれば、店をしたい人が地元からも出てこられ、店をしながら住み続ける人も出てくるので、それを一概に否定することはできないと思う。

問題は変化のスピード。ゆっくりと観光地化が進むのであれば、地域でまちづくりの統一ルールを決めて、良いものを選択し悪いものを排除することは十分可能だと思う。

実際、全くの住宅地が、環境がよくなり少しずつ良い感じの店が増えていって、周りもそれなりに受け入れている所が多くあります。



(次頁に続く)